

EurekaXIV

六年制通信 No.16 令和8年9月1日(火)号

寂かなる道

毎年感心しているのですが、この時期になると必ずツクツクボウシが鳴きますね。几帳面なセミやこと。そしてあの声を聞くと、夏休みは終わりですよ、もうすぐ新学期ですよ、また授業が始まりますよ、そう言われているような気がします。

今日から二学期が始まります。皆さん、元気でしたか。この夏も中高生の水難事故のニュースが何度かありました。その度に心臓がバクバクするのを感じながら、改めて君たちが事故に遭わないように祈っていました。

六年生の諸君は、これから秋に向けていよいよ大変ですが、平凡な毎日に負けないように勉強を続けて下さい。もちろん他学年の諸君も受験生に負けないように勉強しなくてはなりませんよ。君たちもいずれ、すぐに、六年生になるのですから。

勉強を続けるのは辛抱が必要ですね。なかなか理解が進まないと、テキストが悪い、教え方が悪い、勉強の仕方が悪いなど、原因を探そうとしますが、それは意味のないことです。今の学校教育のテキストはよくできています。教え方を云々するなら学び方の方がよっぽど問題でしょう。そして勉強の仕方、例えば単語の覚え方がわからないなどと言う人がいますが、宣長の言うように、そんな方法論は問題ではありません。勉強の進まない原因は、ほとんどの場合が「勉強不足」です。圧倒的に量が足りないのです。辛抱が足りないのです。勉強をしたりしなかったりするから身につかないのです。

「学問の大禁忌は作輟なり」は本当のことです。毎日、同じように流れていく毎日、ちゃんと勉強を続ければ、一見平凡に見える日常の中に「わかった!」と思える瞬間が来ます。その時君の頭の中に波乱が起きるのですね。自分にしかわからない波乱です。そうなるともう元へは戻りません。今までわからなかったことが加速度的に、芋蔓式にわかるようになってきます。その領域に至るまで続けることです。波乱を起こすには膨大な量が必要なのです。その量を勝ち取る戦いは「寂かな戦い」です。毎日の穏やかな、そして平凡な、同じことの繰り返しのような勉強の中で起こるのですから。

君たちは長崎の「如己堂」を知っていますか。永井隆博士の、被爆後の療養のために建てられた、たった二畳しかない小さな小さな家です。機会があったら訪れてくるといい。記念館には石碑があって、そこに「玉の緒の命の限り吾はゆく寂かなる真理探求の道」と刻まれています。真理探求の道は寂かなのですね。私は、この「寂か(しずか)」という言葉に、永井の飾り気のない、穏やかで平凡な、それでいて真理を求めて勉強を継続する姿が見て取れる気がします。永井の『ロザリオの鎖』(アルパ文庫 PP.19-20)にこんな文章があります。医学部で精密な実験をやってみて、永井は自然科学的方法に

は限界があることを知るのですね。自然科学こそ万能と考えていたのに宇宙のあらゆる問題を解決しうるものではないと知るわけです。永井は真理探求の道は自然科学的方法しかないと思い込んでいたから、靈魂の存在を否定していました。これに続けて「私は自然科学という分野が意外にも狭い、不完全な矛盾だらけのものであることを知って、真に驚いた。自然科学において真理と認められている法則が実は仮説だと知って、さらに驚いた。そして精密な実験を重ねるほど、人知の低さとその考案した研究方法の不備を見いだして、いよいよみずからへりくだらねばならぬと思った。超自然界を事実体験するに及んで、かつて靈魂を否定して得意であった日を恥じた。そしてパスカルのパンセがはじめて了解できるようになった」とあります。

永井博士は有名でしたから、もちろん「如己堂」も記念館も何度も（高校の修学旅行が長崎でしたから）行ったことがありましたが、博士のことをそんなに詳しく知ろうとは思っていませんでした。しかし、この夏にこの本を読んでいく感動しました。『ロザリオの鎖』から引用した箇所を読んで、君たちはどう思いましたか。永井隆という一人の医学者の人生観を根底から覆すような告白だとは思いませんか。これは大きな波乱です。それがどこから生まれたかを考えた時、この本の告白と石碑の刻まれた言葉が合致したように思えたのです。真理探求の道は寂かである。寂かな中に勉強を継続する強い意思が見えます。そして継続の果てに大きな波乱が訪れたわけですね。

君たちの勉強も同じだと思うのです。平凡な毎日続けるうちに非凡な何かが頭の中に弾ける瞬間が来ると信じて、毎日を寂かに勉強してください。

今週のおすすめ

・七河迦南 『七つの海を照らす星』（創元推理文庫）

七海学園は児童養護施設。主人公は勤めて二年目の保育士北沢春奈。学園に伝わる様々な謎を児童福祉司の海王さんの助けを借りて解き明かしていく物語です。創元推理文庫から出ているので、分野はミステリーなのですが、どうかなあ。確かに各章に一つずつ謎解きがあるのですが、その謎の裏には児童養護施設に生きる子どもたちの抱える問題があって、それに寄り添う北沢さんと海王さんの物語、ヒューマンドラマのような感じがします。この本には七つのミステリーが収録されています。「蘇った先輩」「捕まえられない廃屋の幽霊」「血文字の文子」「非常階段で消えた幻の新入生」「開かずの門の浮姫」「トンネルで囁く暗闇の天使」、そして最後七つ目の謎は「誰も知らない謎」。最終章では北沢春奈の親友、野中佳音と海王さんの三人でこれまでの謎を振り返り、新しい解釈が行われて読者は驚くことになる、という仕掛けです。伏線があちこちにちりばめられていますので、皆さん、注意して読んで下さいね。

さて、この作者七河迦南の名前ですが、何か気になりませんか。「ななかわかなん」と書いてもわからないかな。では nanakawakanan ではどうでしょう。ローマ字にしたとき左右どちらから読んでも同じですね。第四話では回文がたくさん出てきます。そしてこれも、ちゃんと伏線になっています。最終章をお読みください。

BGM は 天地真理 の ひとりじゃないの でした…。